

草 創 期 篇

笹川会長が語る
競艇30年

笹川会長対談



〈昭和56年6月8日〉 笹川記念会館



社団法人 全国モーターボート競走会連合会々長
菅川良一



元衆議院議員
坪内八郎

海運立国をめざして

坪内 モーターボート競走も、ことして「法制定30周年」を迎えたわけですが、これを機会にきょうはひとつ、モーターボート競走の生みの親・育ての親でいらっしゃる菅川会長に、法案成立までの経緯やらエピソード、ひいては今後のあり方などにつきまして、いろいろとお話を伺わせていただきたいと思います。

菅川 ぼくはことしを「法制定30周年」の年というよりは、今後100年の計を立てる年、つまり「競艇元年」だと思っています。モーターボート競走は、公営競技の中では一番遅れてできた、いわば弟分であるにもかかわらず、売上では先輩の競馬、競輪、オートレースを抜いているし、その収益金による事業の業績はすでに世界一となった。しかし、だからといって30年の次は31年——というような甘い考えではいけない。備えあって憂いなし、で、この辺でもう一度頭を切り替え、競艇元年ということで出直さなければ駄目になるという考えです。

坪内 戦後、軍部がなくなって軍馬も廃止。そこで農林省が「競馬」を、また復興都市の関係から通産省が「競輪」と「オートレース」をやった。そうして、やがて運輸省の「モーターボート競走」ということになるわけですが、それを積極的に推進された菅川会長のそもそもの発想、つまりモーターボート競走を公営競技にして……、というお考えは一体どういったことから思いつかれたのでしょうか。

菅川 なによりもまず、戦争で破壊された日本を建て直すためには金が必要であった。個人の金、などという、たかの知れた金ではなく大きな金が必要であった。

一方、日本は四面が海であるから、発展するためには「海運・造船」立国でいかなければならないのに、戦争のため造船所も壊滅的な打撃を受け、世界最低となった。これを

まず建て直したい。同時に、海事思想の普及、また海外への飛躍ということを青少年に植えつけてもいかなければならない。こうしたことが第一の目的で考え出したわけです。

坪内 聞くところによりますと、会長が戦犯容疑者として巣鴨プリズンに抑留されておられた頃、すでにそういう構想を抱いていたということですが。

菅川 それはこういうことです。ぼくは何をするにも命がけの男なんです。命をかけなかったらどんな事業だって成功しない。ぼくは大阪でただ一人のA級戦犯容疑者として巣鴨に入ったわけであるが、たとえ自分は死刑となっても日本の立場を連合軍に理解させなければならないという考えから「日本は侵略戦争をやったのではない。日本が侵略戦争をしたというふうに決めつけるなら、それは連合軍も同罪なのだ。」と言いつづけた。巣鴨に入る前ぼくは衆議院議員だったから、自分の選挙区などでも連合軍に毒づいた演説ばかりやっておった。そのあげくの勾留だから、入ってから絶対にもその態度を変えなかった。

坪内 祖国日本のためにあくまでもがんばると……。

菅川 ぼくは入る前（巣鴨プリズンへ）は、十分に日本の立場を主張して「死ぬつもり、だったから、自分の墓までつくってから入った。

日本はいま裁かれている、われわれはその代理人なのだ。



日本という国家は悠久であり、われわれは大海の波のようなものであるから、この祖国のためにオレは命をかけるんだと…。ぼくは正義のためには命もいらん！という男だから、その迫力にはみんな肝を抜かれておったナ。しかし姿勢が一貫しておるから、向うの人間（連合軍側）もむしろ好意的な態度だった。

その頃、抑留されている人間の中には絞首刑をまぬがれたい一心で、宗教をキリスト教へくら替えしたりする者もいたが、ぼくは仏教徒だからと、そういう話には耳も貸さなかった。そういうふうに正々堂々とやるから命がある。信用もある。

ぼくは、当時ソ連が日本から北方領土を略奪したことも、これを「犯罪者」だといって非難したんです。そしたらアメリカの検事が、そういうことを言うとソ連へ連れていかれて八ツ裂きにされるかも知れん、と言う。かまわん！と言った。どうせ人間いつかは死ぬ。オレは墓までつって来てるんだから、そうになったら正義擁護の鬼となって人類の魂の中に永遠に生きるんだ、と。

坪内 そういうやりとりは記録として残って……。

笹川 いや、ぼくの当時の記録はひとつもない。そんなもの残したら向うが損するから。

そういう裁判があって、それがまたA級戦犯の裁判とし



ては初めの終りであった。その頃、これ以降はもう裁判は行わない。つまり、処刑もしなければ永久に釈放もしない、という噂が流れた。ところがそうになると、こっちは死ぬ気で入ったのであるから、これには困った。生きているということであればこれからのことを考えざるを得ない。その頃です、ふと見た向うの雑誌に、モーターボートの記事が載っていた。

坪内 ライフ誌を読んで、米国では自動車よりモーターボートのほうが人気のあることをお知りになり、ならば、海運国日本ではモーターボート競走をギャンブルとして開催、その収益金を市町村の財政に寄与したらよいのではないかとお考えになった…と伝え聞いていますが。

笹川 向うでは、モーターボートを持っている者は自動車を持っている者よりランクが高いようなことが書いてある。丁度そんなときに、B級戦犯の一人に福留^{ふくとめ}という海軍中將がおって、こういう話をした。彼がフィリピンのレイテ湾にいた頃のことだが、小さなモーターボートの前に爆薬を積んでダーンと離すと、これがどえらい勢いで障害物にぶつかる。で、これを「案」として海軍省に話したのだけれど、当時は大艦巨砲主義だから相手にしてくれない。もし、レイテ湾であれを持っておったら、どれだけ相手側に損害を与えることができたかわからない、というような話だった。そういうこともヒントになって、「モーターボート競走というのは面白いな」という考えをもった。

【 母の遺言で葬式も出せず、 】

坪内 競走法成立の前後にはいろんな人が表面へ出てまいりましたね。私も大野伴睦先生に呼び出されたり、神田代議士と折衝するなどしたわけですけども、その頃会長は殆んど表に出ていらっしやらない……。



笹川 パージのために表面に出られなかったこともあるがなによりも、当時はまだ2500人くらいの方が戦犯として抑留されておった。それをぼくの母が指摘して、「おまえはまだ政治をやってはいけません。戦犯の方たちを全員、早く出すという仕事をまずやりなさい。私もお宮さんへお百度参りしますから」と、そう言ってそれからの10余年間、雪の日も雨の日も欠かさずそれをやった。ぼくも10年間禁酒禁煙をやった。

そのうちに母は倒れてしまったんだけど、そのときにもまだ「いまどのくらい残っていらっしやるのか」と聞く。で、「100人ほどです」と答えたら、「それはおまえの力不足です。万一私がこのまま死ぬようなことがあっても、戦犯の人が全員出てしまうまでは葬式をやってはなりません」と言う。これには弱った。

坪内 どうなさいました。

笹川 いろいろ研究してみたけれど、日本ではまだミイラにするような技術がない。それで、とりあえず土葬にした。全員が出てしまうまで、本葬はしなかった。ところが、母が死んでから6ヵ月ほどしたら全員が出たのです。

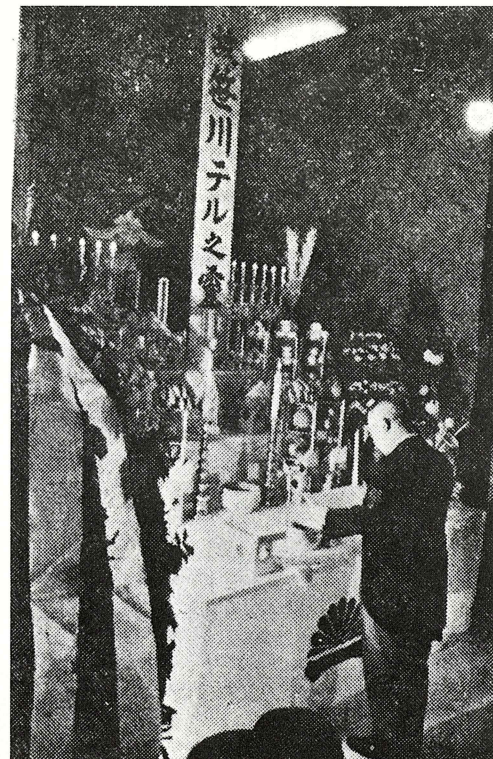
坪内 会長はもうずっと先に？。

笹川 ぼくはそれより10年前に出ています。で、みんな出てから青山斎場で本葬をやったんだが、仰々しいお葬式を

してはいかん、そんな金があったら困っている人に寄付をきなさいということであったから、花も何も一切いただかなかった。しかし、東条大将、山下大将、木村大将の奥さん方をはじめ、中將、少將の奥さん方が50人くらいも来てくださって、それぞれクローク係などお手伝いをやってくださった。まあ、そういう人たちのおかげで今日のぼくがあり、モーターボート競走の成功があるのだと思う。ぼくがナンボしゃっちょこだちになっても、1人じゃだめです。

坪内 会長が当時パージ中であり、母上のお言葉もあって表面に出られなかった理由はわかりましたが、そのかわりに福島世根女史、矢次一夫氏、平野晃氏といった方々がいろいろと活動なさったとお聞きしていますが……。

笹川 福島世根さんという人は、ぼくが巣鴨から出てきてから、ボートを走らせたり、またドッグレースをやりたいなどと言っていた人です。また矢次という人は陸海の両方



がよくわかる男で、それでぼくが運営委員長ということに推したんです。

坪内 初めの頃は競走場の候補地があるという、すぐに調査しに行ったわけですが、矢次さんは運営委員長ということで必ず行っておられたのですね。

笹川 そう。まあその間いろいろあって、藤君が怒ったこともある。

坪内 当時、競走場とするための条件というのがあって…

笹川 昔は競艇場をつくるに当たっての基本的な条件は、1時間以内に来れる後背人口はどれだけか、それが第1点。次が田んぼなんかを掘り返したりして従来の姿を壊してはいけない。池とか川とか海を有効に使う。そういう条件がないといけない、ということになっておった。

1升ビンには1升しか入らない

坪内 時代はまたさかのぼりますが、昭和26年3月12日にモーターボート競走法案を第10国会に提出、3月29日に衆議院運輸委員会で可決、同日衆議院本会議可決、6月2日参議院運輸委員会可決と、順調に階段を登っておった。と



6

ころが同2日の参議院本会議で否決されてしまったんですね。このとき藤さんが広川弘禅さんのところへ……。

笹川 当時ぼくはページでそういうところへ出向くことができない。それで藤君をぼくの使いとして広川邸へやったんだ。

坪内 競走法成立のための運動資金というのは…。

笹川 一切切切ぼくの金です。銀座の事務所もぼくのなら自動車もぼくの、みんなの食べものに至るまで費用は全部ぼくが出しています。

坪内 競輪でも当時1レース場を誘致するのに500万かかるというておりましたね。モーターボートのほうはまったく金がないわけですから。

笹川 1銭もない。

坪内 その資金というのが「不思議」とされていたんですね。

笹川 むずかしい金はみんなぼくが出しているから…、やはり誰かが犠牲にならなければ。しかしぼくにしても、その金を使ったからといって裸になったわけじゃないし、使わなかったからといってどうということはない。

だからたとえていうと、1升ビンには1升以上は入らないということ。ぼくはそういう考えで、世のため人のためになることには金を出す。だから今日になったのです。

坪内 とにかく競走法は、衆議院では採択されたけれども参議院運輸委員会で1票差の可決、そのあと本会議で否決されたんですね。

笹川 そうそう、あれは向うで敗れた場合は本会議へ持って帰って……。

坪内 また3分の2要りますからね。しかし、衆議院本会議再提出でどんでん返しの可決。そういうことは戦後ではモーターボート競走法が初めてじゃないですか。

笹川 最初の最後です。

坪内 先般亡くなられた藤吉男氏も裏でずい分働かれたよ



うですが、ともかくあの頃は世情もいろいろと厳しかったですからね。GHQがニラミをきかせておりましたし。

笹川 そうそう。しかしぼくには協力的な人も多かった。

各界の名士に協力を要請

坪内 ともあれそうして「モーターボート競走法」という法律が成立した。ところが各地で動きを始めていた競走会はなかなか意のごとくでない。どうも中央に早いとこ連合会をつくらなくちゃいかん。その連合会の初代会長には笹川会長が当然だろう、と思っておりましたけれども……。

笹川 そのときはページだからなれない。それで、後に日本商工会議所会頭になった足立さんを頼んだ。ページが解けてから選手交代したわけです。

坪内 エライ人が出てきたと思ってびっくりしたんです。会長の身がわりとして出たおられたということですね。

笹川 そうなんです。仕事はぼくがするから名前だけで結構だよ、と。連合会の会長は足立さん、その他各地競走会の会長もその地方の有名な財界人に就任してもらいました。そういう意味ではモーターボートは生まれがいい。

坪内 この各地「競走会」をつくるについても、会長ご自身いろいろとご尽力されておりますね。

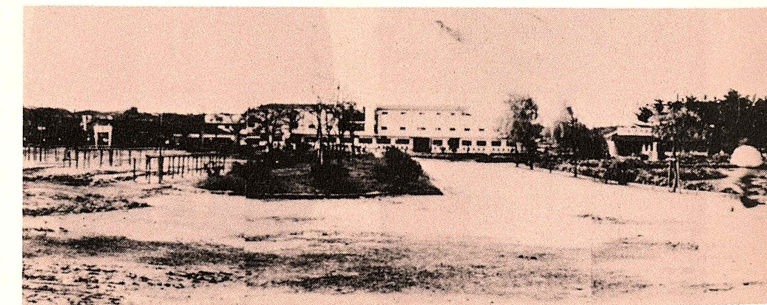
笹川 そう。まず競走会発足のおぜん立てをして、その上にどの地域でも一流の諸君を集めて競走会をつくった。たとえば兵庫県では県の商工会議所の会頭が初代の会長です。広島では中国電力の社長です。そういうふうには、各地の超一流の人間を立てているんです。

坪内 当時のことを知らない人間が増えてきているということもありますが、会長ご自身もこれまでそういう話をなさっていないですね。

笹川 恩きせがましくなるからしなかったんだが、まあ、大変な苦勞はあった。しかし、目的がはっきりしていることもあって、各地のトップクラスが会長になってくれたわけだし、信用もしてくれた。と同時に監督官庁である運輸省もぼくを信頼して、全面的に責任を委ねて容喙干渉しない。だからできた。

坪内 そういう会長のご苦勞もあってモーターボート競走は非常にいい生まれ方をした。ところが、33~34年(昭和)頃までは売れない時代が続きましたね。赤字赤字で。たとえば住之江の狭山時代とか……。

笹川 新しく競艇場をつくるについては条件がいろいろあるから、大阪ではなかなかいいところがなくて、結局あの狭山池に落着いた。そのとき大阪の会長は三井大阪商船社長の伊藤武雄君でこの人は関西でも大物です。で、理事長が南海電車常務の吉田君だった。そこで、自分のほうに持つ



7

てきてくれというので南海電車沿線の狭山へ持っていった。

坪内 その頃は給料すらみんなもらえない程売れなかったということですが。

笹川 売れない。赤字ばかりです。それで16都市がもうやめたい、と言いだした。こんなに損するものをやらされたのではかなわんと言うから、子供も生まれて1年目は1つ、5年たったら5つ、10年で10歳。25歳までは伸び続けるよと。必ずよくなるから、その間損がいったら全部ぼくが引き受けてやる。そういうことで強引に箕面市に施行者になってもらったんです。それが今日では1銭の資本も出さないで年間数十億円もうかるようになったんです。

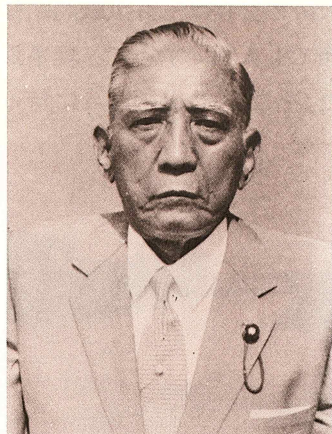
坪内 東京でもずい分売れなかったですね。

笹川 売れなかった。競走会が職員に給料を払えないというので金を持って行ったこともあるし、その他いろいろな費用を出してあげた。

坪内 その金は返してもらいましたか。

笹川 返してくれたものもあるし、くれないものもある。しかし、ぼくはこれをめしの種にしてないから。そんなことをしていたら運輸省だってそう簡単にはうんと言わない。

自ら長距離レースに出場



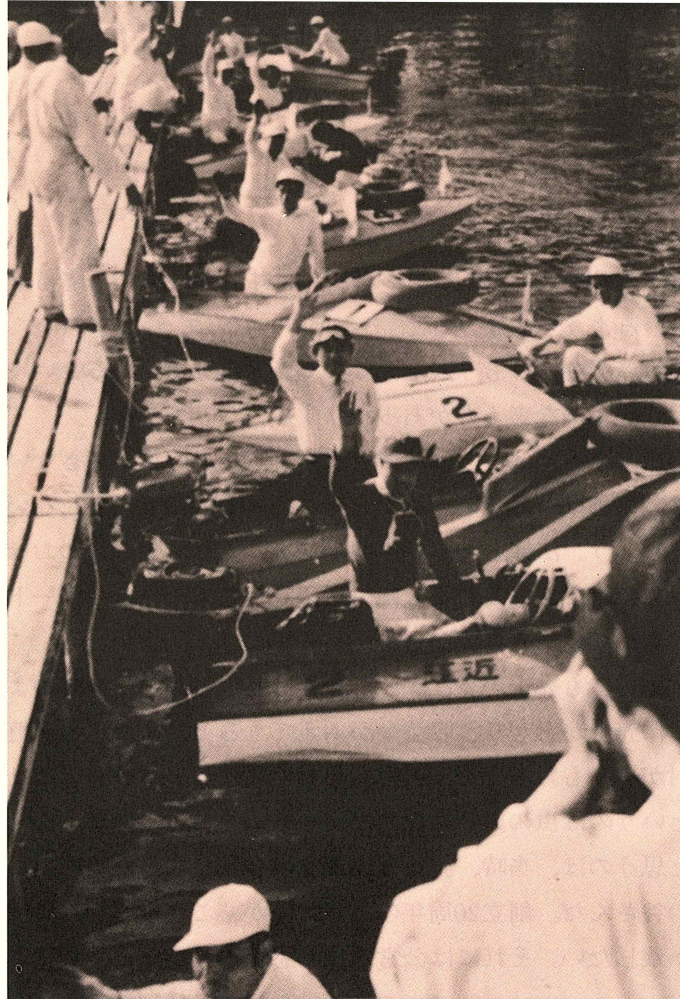
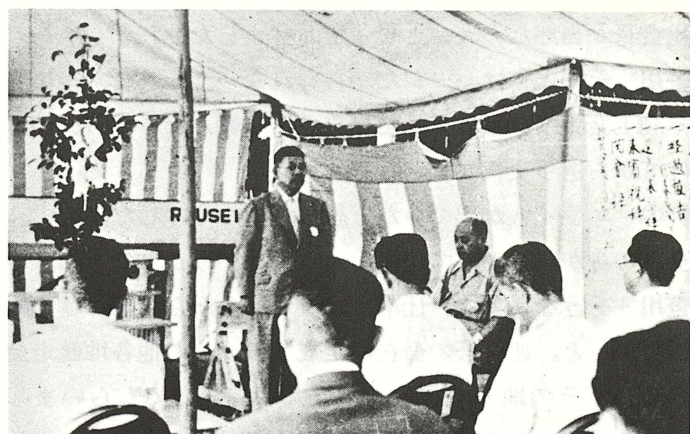
坪内 連合会、競走会が設立されつつあるその状況の中で会長はすでに選手の養成を考えておられ、亡くなられたご実弟の春二氏に選手養成の手配をなさったという……。

笹川 当時、日本中でモーターボートに乗れる人はアマチュアでやってる30人から50人位で、あとの人はモーターボートを見たこともない。これは早く選手をつくらないと大変なことになると気づいて、弟の春二に選手養成の手配をさせた。春二は人を介して琵琶湖の佐藤与吉氏と知り合い、選手養成を依頼し、8月の末に選手養成を開始した。その頃開催準備の進んでいた大村でも選手のいないことに気づいて養成を開始したということだ。

坪内 ところで昔、会長ご自身も琵琶湖縦断レースにご出場なさいましたね。ボートはどこで乗れるようになったのですか。

笹川 それは隅田川で練習したんだよ。ぼくのとは女房でもみんな乗る。

琵琶湖でやったというのはずっとのちのことで、その頃農林大臣もやったことのある滋賀県の知事とぼくは仲がよかったものだから、話をしているうちに琵琶湖縦断レースをやってみてはどうでしょうかということになった。それで10名の出場選手のうち1人だけ覆面の選手をつくらうと。それにオレが乗る。それはぼくと知事しか知らないこ



とだ。で、懸賞を出すといったから大勢の人が来た。結局は2着になったんだが、ぼくが乗ってるなんて誰も思わないから当たらない(笑)。あれは本当は私が1着なんだ。

坪内 安心してゴールの前で手を振ってる間に抜かれたという……(笑)。

笹川 そうそう(笑)。

坪内 そうしますと、巢鴨を出られて間もなくからもうボートに乗ったりなさっていたようですが、たとえば「フライング・スタート」などということは、やはり舟艇協会の方たちとご相談なさって……。

笹川 そう。当時日本でモーターボートにくわしいといったら舟艇協会だけだったから、法制化のための条文づくりにあたっても、あそこの連中が中心となったわけだ。原田君とか、いま雑誌「舵」というのをやっている土肥君、そ



れから鈴木君、矢崎君などがずい分と手伝ってくれた。

坪内 それを持って運輸省に行かれたわけですね。

笹川 そういうことです。

原因のない結果はない

坪内 草創期の頃は、いろいろなお苦勞があったわけですね。

笹川 設立当時も大変だったが、ぼくはむしろこれから先が大事だと思う。ここまで発展して、こういうふうによくなってくるとやきもちを焼く者がでてくるから。

いまは国(日本)の名誉、信用を高めている者が攻撃さ



であり、造船立国である、と。

坪内 そういう大前提を少々踏みはずしかけている者も最近いるようすな。先般、ある地方へ行ってきたのですが、施行者の中にはもう競走会はなくとも自分でできるというような単純な考え方があったりする。

笹川 そういうことは法律を改正でもしなければできないし、草創期からのいきさつを知っている人は考えもしないでしょう。法律をつくり、競走会をつくり、すべてのおぜん立てができたところで施行者に話をしてモーターボート競走ができたのですからネ。

施行者も売上が少なかった時代は苦勞したが、今日のように売上が上がり、収益金がふえてくると、まわりの市町村がやきもちをやく。苦勞もしないで収益金だけをよこせというのは虫のいい話なのだが……。その点、偉かったなと思うのは、当時、施行者協議会の会長であった鳴門市長の谷さんだ。創立20周年のときぼくが、これを記念して何か残したい。それには公営競技の恩恵を、自分たちだけで



なく近所隣りにもおわけしたいと。それでBG財団というものをつかって、これまで恩恵を受けていなかった市町村にも……という話をしたら、谷さんはいっぺんにのってきた。それでBG財団ができたんです。

坪内 まあ一部ですが、施行者が競走をやるから競走会もやってゆけるのだ…というような考え方もあるようです。

笹川 それは間違いで、ほかの公営競技は施行者ができから、「自分のところで運営したらいかん」という法律があるため、それではとみんなを集めて競走会をつくった。だから施行者が強い。ところがうちの場合は、ぼくらが法案をつくって金も出して、それから施行者になってもらった。競走会が先にできて、最後に「あなたやりなさい」と。施行者が後で決まったんですから他の公営競技とは生れがちがうんです。

坪内 これからがむしろ大事という先ほどからのお話ですが、その意味で競走会のあり方を始め連合会、選手会、施行者、それに監督官庁を含めまして、今後の心がまえというか、将来の決意というか、その辺の構想をお聞かせくださいませんか。

笹川 結論的にいうと、今日ここまでよくなったというのは「結果」なんだよ。原因のない結果はないから、ではその原因はどこにあるのかというと、ぼくのような阿呆、つまり金を出した上に全責任を1人で負う。功績は他に分かつ、自分の利欲のためではなく世のため人のためになればいい——という考え方でやってきた阿呆がいたということ。文句を言わずに私に協力してくれた多数の諸君のおかげで、今日のよい結果を生んだ。したがって今回の30周年を競艇元年として、ファンを大切に新しい出発をしなければならぬというのは、何年か先の「いい結果」を見るための「いい原因」をつくっていこうということでもあるわけだ。

坪内 モーターボート競走の収益金は、国際的にもずい分役立っているわけですが、モーターボート競走そのものについて、世界の人の評価というのはどんなものですか。

笹川 イギリスでは競馬場へ行くのにシルクハットの正装で行くが、モーターボート競走場だって同じようにひとつの社交場と考えている。

坪内 モーターボートレース場を自分の国に誘致したいというような意見はありませんか。

笹川 それはある。この間もさる方から電話があつて、ポリビアでやらせてくれないかということだった。しかし、うちは外国でやる権利はもってないが指導のほうをお引受けしましょうと答えたんだ。まあ、いろいろと話はある。だが、金もうけしようと思つてやるのでは結局成功はしない。

坪内 モーターボートの将来ということで、この先、法律が改訂されるとかあるいは自民党と革新政党的に入れ替りで



どうか、そういう面での不安というのはありませんか。

笹川 ぼくが会長をやっている間はだいじょうぶ。

坪内 それは会長の「鉄の信念」ですか。

笹川 そうです。欲ばりで力のない者がやったらつぶされるが、ぼくの背後には千何百万という人がついているから大丈夫です。一番大事なのは国民の生命財産を保全する消

防と防火協会と、将来日本を背負って立つ「青少年の指導育成」ということにぼくは全力を投入している。次に、保健、医療関係にも力を入れているから、国民はみな共感を持つわけだ。特に消防に関しては、少年・婦人消防に続いて今度は「幼年消防」というのをつくっている。子供の火遊びが一番こわいから……。そういうふうには、ぼくは10年、20年先のことにソロバンをはじいてやっているわけだから、政府だってそれを邪魔する事はしない。むしろ喜んで支援してくれている。

坪内 会長は外国にいかれて、向うの偉い人とさあ握手というとき、必ずその前にその国の国旗に礼をなさる、と伺っていますが、それは会長の世界平和主義観からですか。

笹川 礼と節と義理と人情と親孝行、これがなかったら下等動物と同じだ。ぼくはそういう信念だから外国へ行っても、まず国の象徴である国旗に心の底から敬意を表す。するとそういうことをする人間はあまりいないから、ぼくにいっぺん会った人は全部ぼくのファンになる。それで言うべきことはバンバン言うから信用してくれる。だから各国から勲章や名誉市民を贈られている。ぼくくらい多く持っている人間はまれだと思う。ただし勲章も名誉市民もファンのお金を活用し、加えて私が会長をしている1300万人以上の



全員の功績が認められ、その代表として頂戴したと思っている。

坪内 同時に、会長は下の人にも誠意をつくされる。昔、大森のレース場でケガをした選手が、選手として再起できず銀座でお汁粉屋を開いたら、すぐに行ってやられたとか、福岡の役員の方が病気と聞かれてお見舞いに行かれたとか。

笹川 それは当りまえのことです。生きている者だけではない。死んだ人に対しても親切でなかったらだめだよ。

ぼくは82歳だけど、まだ老眼鏡もいらぬし耳も目もいい。それは結果なんだよ。なぜかという、ぼくは良心に恥ずることをやらない。だから魂が常に平安である。それが第1点。第2点は世界中の貧しい人、病気などで苦しんでいる人のことを考えて、何事にもぜいたくをしない。物がある間に寄付して節約をする。そういうことが原因で現在の結果を見ているわけです。しかしぼくは、60歳を切り捨てておるから、いま22歳や(笑)。

坪内 どうかいつまでもその「若さ」を保ち続けられまして世界を、日本をご指導くださいますようお願いいたします。きょうはほんとうにありがとうございました。

